

天草は今

牛深ハイヤ祭り



「牛深ハイヤ祭り」は毎年四月の第三金曜日から三日間開催されます。何と言っても土曜日の夜と日曜日の昼間の二回、通りを埋め尽くす「ハイヤ総踊り」が圧巻です。そして日曜日、港周辺で大漁旗を掲げた数十隻の船が海上を疾走する「漁船団海上パレード」も必見です。

昭和21年の牛深大火の復興と大漁を祝って、「港まつり」が昭和23年に開催されました。昭和47年には「牛深ハイヤ祭り」と名称を変え現在に至っています。昭和58年から「船団パレード」も始まりまし



牛深ハイヤ節が唄われるようになったのは江戸時代後期です。熊本を中心に唄われていた「二上がり甚句」を奄美から伝わった「六調」という南国特有のリズムで味付けして「牛深ハイヤ節」が誕生したという説があります。更に全国各地へ伝わって、いわゆるハイヤ系民謡のルーツと言われています。

牛深は天然の良港に恵まれ、今でこそ養殖に主体を移していますが、かつては百艘からの漁船が寄港していたほどの、熊本最大の漁港として賑わっていました。さらにその昔に遡ると、漁船の往来は盛んでしかも海運の中継基地で諸国の帆船が出入りする港町として繁栄を極めていたのです。多くの船乗りで溢れ、遊郭や料亭が立ち並んだ大歓楽街であったと思われ

「新銀取り」と呼ばれる船乗りたちを接待する女性たちがいて、ハイヤ節誕生に大きな役割を果たすことになりました。「新銀取り」は大正時代まで続き、その収入は牛深経済を左右するほどの財源だったとか。彼女たちが港を見渡せる高台への細い坂道を登って、船乗りたちを出迎えた「新銀取坂」の地名が今なお残っています。

「牛深ハイヤ節」は船乗りたちとの酒盛りの席で生まれ唄われたのです。その踊りには中腰で重心が低く、網投げ、櫓漕ぎなど漁師の労働の動きが取り入れられているのもうなずけます。南の風を九州地方ではハエと言いますが、ハエがハエヤとなり訛ってハイヤとなっていたと考えられます。

帆船は牛

深から南風

にのつて、北上して長崎の野母崎

あるいは西彼杵半島沖

の松島の港を辿りながら平戸島の田助港へ入ります。更には呼びか

ら下関、瀬戸内海の港に立寄りながら大阪へ向かうのです。

「ハイヤで今朝出た船はどこの港に入れたやら」という歌詞は、船乗りの身を案

じる新銀取りの女性たちの心情を表しているのでしょうか。この間、田助(平戸)ハイヤ、五島ハイヤ、呼びハイヤと「牛深ハイヤ節」の支流が作られていくのです。

一方、大阪を春に出発して瀬戸内海をぬけ、関門海峡から日本海に出て、一路北海道へ向かうのは北前船と言われていました。この航路の寄港地に「牛深ハイヤ節」が足跡のように残されています。

浜田節(鳥根)、宮津のハイヤ踊り(京都) 佐渡おけさや寺泊おけさ(新潟)、庄内ハエヤ節(山形)、津軽アイヤ節(青森)さらには北海道の江差つきばやしまで行き着くこととなります。この他に阿波踊りや潮来甚句も「牛深ハイヤ節」がルーツとは意外でした。



牛深ハイヤ節

- 一、ハイヤエー ハイヤ ハイヤで今朝出した船はエー どの港に サーマ 入れたやらエー
- (囃し)エーサ 牛深三度行きや三度裸 鍋釜売っても酒盛りやして来い 戻りにゃ本渡瀬戸徒歩渡り
- 二、ハイヤエー きたかと 思えばまだ南風の風ヨー 風さえ恋路の サーマ 邪魔をするエー
- (囃し)エーサ 黒島沖からやって来た 新造か白帆か白鷺か よくよく見たればわが夫様だい
- 三、ハイヤエー ハイヤ ハイヤで半年や暮らすエー 後の半年や サーマ 寝て暮らすエー
- (囃し)エーサ 段々畑のサヤ豆は ひとサヤ走ればみな走る 私しゃお前さんについて走る
- 四、ハイヤエー とつちや投げ とつちや投げ三十四、五投げたエー 投げた枕にゃサーマ 罪は ないエー
- (囃し)エーサ 何処から来たかい薩摩からいかりも持たずによう来た様たい
- 五、ハイヤエー たんと 売れても売れない日でもエー 同じ調子の サーマ 風車エー(囃し)エーサ 魚貫万匹 茂串鯖 宮崎鯉ん骨横ぐわえ 加世浦キンナゴ逆すごき天附渡れば室鰯の魚 三匹なめたら どつとした